

128 毎日

北九州の市営団地

天井に「石綿」使う

市議会で判明

北九州小倉南区上吉田の二丁戸。天井の発泡スチロールの断熱材を化粧するため、市営団地のうちの四棟のうちの天井で発がん物質とされている石綿(アスベスト)が使つかり、市営住宅を補修する市住宅供給公社がベニヤ板で落下防止工事をしてきたことが七日の同市議会一般質問で取り上げられた。

野依勇武議員(共産)が追及したもので、同議員や市建務局の話しによると、石綿が使われてきたままになっていたのは四十四年完成の鉄筋コンクリート五階建ての四棟最上階社が天井の一部(約二〇平方

の二丁戸。天井の発泡スチロールの断熱材を化粧するため十一月三日、最上階の八層に吹きつけられていた。

者から「天井がはく離しかけているが、アスベストではないか」と通報があったのが発見のきっかけ。市は石綿の発がん性が社会問題化したため、八月から昨年三月までの予定で、市営住宅も含めた市内の公共建築物で石綿使用の可能性(三十五年の間に約千八百五十棟)を調査し、現在、専門機関に分析を依頼している。結果が出た後公表する

方)を採取。専門機関に分析を依頼し石綿使用と判明した。市が保存している同団地の建築設計書には石綿使用の記載はない。石綿の発がん性が問題になる前、聞け負った建築業者が見直しをよくするために使ったらしいが、市は浮遊粉しん化して下に落ちるのを防ぐため、二丁戸全戸の天井をベニヤ板で遮へい。同月二十六日と二十八日の二日間、うち五戸で部屋内部での浮遊粉しんを測定、現在、専門機関に分析を依頼している。結果が出た後公表する

この日の議会で野依議員は「最上階に住む人が半年前にもアスベストでは、と会社に電話しているのに、放置した」と追及したのに対して、若山和生・市建築局長は「その段階では、市営住宅にはアスベストは使っていないと職員が頭から思っていたためだ」と釈明。

同議員が「八層の中には七十六年も住み、せまなく症状が治らない。十年後の発がん心配という人もいます。市は家主として住民の健康調査をやるべきだと指摘したのに対して、局長は「浮遊粉しん調査の結果が出るのを待つて適切に対処したい」と答えた。